氏　　名	**廣瀬　絵美**
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第237号
学位授与年月日	2022（令和4）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第５条第１項該当
学 位 論 文 題 目	A Study of the Contributions of A. L. Lloyd and Ewan MacColl to the Post-War Folk Revival in 1950s and 1960s Britain
論 文 審 査 委 員	主査　川端康雄　（英文学専攻　教授） 副査　佐藤和哉　（英文学専攻　教授） 藤永康政　（英文学専攻　教授） 山口俊雄　（日本文学専攻　教授） 木下　誠　（成城大学　教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文では、1950 年代から1960 年代にかけてイギリスで展開されたフォークリヴァイヴァル（長らく口承で伝えられてきた作者不詳の歌謡の復興運動）の歴史的、社会的背景を踏まえつつ、その文化運動のなかで重要な役割を果たした民俗学者・フォークシンガーのAlbert Lancaster Lloyd (1908-82) と俳優・フォークシンガーのEwan MacColl (1915-89) の活動に着目する。この研究では、Lloyd とMacCollが第二次世界大戦後のイギリスのフォークリヴァイヴァルのなかで扱ったバラッド、フォークソング、炭鉱歌、労働歌を取り上げ、これらの歌が、本来の伝統歌の要素を極力損なわずに、いかに現代の聴衆が共感できるような新しい意味や役割を与えられたか、その変容の過程を考察した。この文化運動の主要人物たちの理論と実践、および彼らによって新しい生命を与えられた歌の分析をとおして、戦後のイギリス社会におけるフォークリヴァイヴァル運動の文化的貢献の度合いと、その意義を明らかにすることが本論文の目的である。

イギリスのフォークリヴァイヴァルは、1950 年代から60 年代にかけて、戦後の急激な社会変化のなかで生成・発展した文化運動のなかに位置づけることができる。LP レコードのリリースやラジオ、テレビへの出演といったマスメディアの活用やフォーククラブという場をとおして、自国に残るバラッドやフォークソングに目を向け、マスカルチャーや商業主義の浸透と結びついた既存の社会システムとは異なる、過去と現在をつなげるような、新たな音楽文化や世界観を示すことにフォークリヴァイヴァルの目的があった。

第二次世界大戦後のイギリスのフォークリヴァイヴァルを扱った先行研究は、アメリカのフォークリヴァイヴァルに関する研究書よりも数は少ない。早い段階では、1970 年代にLaing et al, *The Electric Muse: The Story of Folk into Rock* (1975)やWoods, *Folk Revival The Rediscovery of a National Music* (1979) が戦後のフォークリヴァイヴァルを部分的に論じて

いるものの、ここから派生したフォークロックやエレクトリックフォークといったジャンルとの関連性でしか論じられてこなかった。Dave Harker, *Fakesong: The Manufacture of British "Folksong" 1700 to the Present Day*（1985）およびBoyes, *The Imagined Village: Culture, the Ideology & English Folk Revival*（1993）は、フォークソング収集家やフォークロア学者の手によって、フォークソングが中流階級の文化産物へと改変され享受されたことを指摘した。さらにDave Harker は戦後のフォークリヴァイヴァルを批判し、イギリス共産党に所属していた労働者階級出身のLloyd やMacColl ら左翼知識人が彼らの政治イデオロギーをフォークソングに植え付け、本来の民衆文化を歪ませたと断じた。Brocken, *The British Folk Revival: 1944-2002*（2002）は、ポピュラー音楽学の立場からイギリスのフォークシーンを分析する際に、Lloyd とMacColl の影響力を批判している。しかし、近年では戦後のフォークリヴァイヴァルにおいてLloyd やMacColl が果たした役割が再評価されている。Sweers,*Electronic Folk: The Changing Face of English Traditional Music*（2004）とMitchell, *Postwar Politics, Society and the Folk Revival in England, 1945-65*（2020）は、戦後イギリスのフォークリヴァイヴァルとアメリカのフォークリヴァイヴァルの関係性、アメリカの大衆文化への反抗、ニューレフト運動、さらにはWilliam Morris（1834-96）が主導したアーツ・アンド・クラフツ運動の文脈から論じ、旧左翼との結びつきが指摘されてきたフォークリヴァイヴァルに新たな視野を与えた。

本論文では、従来主に歴史的視点から論じられてきた戦後のフォークリヴァイヴァルの分析に文学研究におけるテクスト分析の手法を採り入れ、Lloyd やMacCollが実際に使ったバラッド、炭鉱歌、フォークソングの詩をもとに、これらの歌をいかにして人びとをつなげる共通文化へと変容させようとしたか、その企図を論じた。「共通文化」という概念は、Raymond Williams による「文化とはふつうのこと」（Culture is Ordinary）という主張を出発点としている（"Culture" 4）。「共通文化」とは、Williams によると、「人びと全体が意味や価値の創造と表明に参加」（"The Idea" 36）できる状況である。「共通文化」の可能性は、戦後のフォークリヴァイヴァルにおいて、フォーククラブという場やパフォーマンスのなかで、伝統歌が人びとに共有され、自由な解釈が与えられていった過程のなかに見出せる。

本論文で用いる一次資料としては、扱った歌のテクストのさまざまなヴァリアント（異型）を比較対照したうえ、フォークリヴァイヴァル運動に密接に関わるLPレコード等の音声資料、またLloyd やMacColl ら当事者の発言を含む雑誌記事、ライナーノーツなどを使った。さらに筆者が2010 年代に数度にわたりおこなったLloyd およびMacColl の関係者たちのインタビューをはじめ、イギリスでのフィールドワークによって蓄積した資料も活用した（一部は電子メールをとおしての関係者への問合せと回答も含む）。これらを用いて、第二次世界大戦後のフォークリヴァイヴァルについて多角的な視点から検討することを図った。

本論文の構成は以下のとおりである。

Introduction

Chapter 1: From William Morris to Cecil Sharp: Folk Revival in the late Victorian and Edwardian Age

Chapter 2: A. L. Lloyd and Ewan MacColl: Activities in the 1930s and 1940s
Chapter 3: The Social and Cultural Background of the Post-War Folk Revival in Britain
Chapter 4: A. L. Lloyd's Adaptation of Ballads "Reynardine" and "Jack Orion"
Chapter 5: A. L. Lloyd's View of Erotic Folk Songs and His Reworking of "The Bony Black Hare"
Chapter 6: The Role of Coal-mining Songs in the Post-War Folk Revival
Chapter 7: The Post-War Folk Revival and Pacifism
Conclusion
Works Cited

第1 章では、19 世紀後半から20 世紀初頭のイギリスで起こった「社会主義運動における歌の文化」と「フォークソング収集」に目を向けた。デザイナー、詩人、社会主義者であったWilliam Morris が1885 年に刊行した運動歌集『社会主義者のための歌』(*Chants for Socialists*) に収録した詩篇を分析し、ひとつの大義を掲げて社会改良をめざす人びとが理念の明確化を図り連帯意識を強めるための手段として、社会主義運動や労働運動に歌がいかに用いられたのかを論じた。この運動は、ニューレフトや平和運動との関わりがある第二次世界戦後のフォークリヴァイヴァルに先駆的な貢献を果たしている。さらに第１章の後半では、「フォークソング収集」について検討した。急速に進む産業化や都市化によって失われつつあった伝統的なフォークソングを忘却と消滅から救いだそうとする目的で、中流階級の人びとのあいだでフォークソング収集が活発に行われた。イングランドのフォークソング収集家として名高いCecil Sharp (1859-1924) は、フォークソングの保存活動のみならず、音楽教育にこれらの伝統歌を導入し、国民文化としての価値を高めようと尽力した。Sharp の活動は、音楽教育をとおして、フォークソングをイギリス国内に普及し、さらにはRalph Vaughan Williams (1872-1958) やGustav Holst(1874-1934) といった音楽家に影響を与えたという点が評価できる。しかし、Sharpをはじめとするこの時期のフォークソング収集家は、教育の道徳的観点あるいは中流階級の読者層を配慮して、歌集を出版する際に、歌詞を「上品」な文言に変え、ピアノ伴奏をつけ、本来の伝統歌と異なる形に変えてしまった。第二次世界大戦後のフォークリヴァイヴァルは、過去のフォークソング収集家が残してくれた膨大な伝統歌を引き継ぎながら、人びとが伝統歌をより身近に享受できる世界を求めた。社会改良運動とフォークソング収集というふたつの営為は戦後のフォークリヴァイヴァルの発展への礎となった。

第2 章では、戦後のフォークリヴァイヴァル運動が本格的に起動する以前、1930年代後半から1940 年代にかけてLloyd とMacColl がそれぞれにおこなった初期の活動を1930 年代イギリスの政治的左翼による文化活動、特にイギリス共産党が関与した文化政策に照らし合わせて論じた。イギリス共産党の作家グループによって創設された左派系評論雑誌 *Left Review* の主要メンバーであったLloyd は、1934年の創刊号に、オーストラリアの牧畜労働者と牧畜経営者との対立をテーマにした"The Red Steer"という短編小説を掲載している。その短編のなかには、プロレタリア革命を願うフォークソングの替え歌が歌われており、Lloyd がすでに伝統歌に社会を変革する力があることを認識していたことがわかる。1944 年には、小冊子*Singing Englishman* を発表した。歴史家のA. L. Morton (1903-87) から

学んだマルクス主義史観に沿って、Lloyd は、*Singing Englishman* のなかでフォークソングを「社会変動から生じた歌」(4) と定義し、経済、社会、歴史の流れから切り離すことができない「労働者階級の重要な文化的偉業」(3) であると主張した。MacColl は、イギリス共産党系列の演劇運動に関与しており、路上劇団「レッド・メガフォン」(the Red Megaphones) に参加したのち、1934 年にJoan Littlewood(1914-2002) とともに、「シアター・オブ・アクション」(the Theatre of Action; 1936年にthe Theatre Union と改称) を結成した。この劇団は、第二次世界大戦後、ロンドンのストラトフォードの劇場に拠点を置く「シアター・ワークショップ」(Theatre Workshop) の創設につながる。MacColl は俳優として演じるのみならず、劇団のために戯曲も数多く書き、劇中にフォークソングや自ら作詞した歌を使用していた。このように文学、ジャーナリズム、演劇といった分野において活躍したLloyd と MacColl は、労働者階級の出自によるそれぞれの経験を生かして、歴史、政治、文化への深い造詣と表現方法を得て、のちのフォークリヴァイヴァルにつながるヴィジョンを形づくっていった。

第3 章では、1950 年代から1960 年代にかけてのイギリスのフォークリヴァイヴァルが、アメリカのフォークリヴァイヴァルの影響を受けながら、ラジオやテレビといったマスメディア、LP レコードの製作、フォーククラブ、フォークフェスティヴァルといった場を活用した次第を明らかにした。さらにNew Left 運動およびその指導者たちとの関わり、劇作家 Arnold Wesker (1932-2016) が組織した文化運動Center 42 におけるフォークリヴァイヴァルの役割、そして1956 年から57 年にかけて若者のあいだで大流行した音楽ジャンルである「スキッフル」(skiffle) とフォークリヴァイヴァルの関係性を論じた。戦後のフォークリヴァイヴァルが形成された背景には、当時イギリス社会において広まりつつあったアメリカ的な大量消費文化・マスカルチャーを人びとが受動的に享受し、批評精神を奪っているのではないかという懸念があり、その反動として創造的な民衆歌の世界を創り出そうとする希求があった。先述したスキッフルは、もともとは1920 年代のアメリカで始まった音楽であり、ギターや洗濯板などを使った手作りの楽器を使用した音楽は、イギリスの若者の心を捉えた。これらの音楽は、アメリカのフォークソングやブルース、さらにはイギリスのフォークソングやバラッドにルーツを遡ることができる。スキッフルの台頭は、フォークリヴァイヴァルが若者文化の一部として繁栄する一助となった。戦後のフォークリヴァイヴァルは、イギリス共産党から距離を置き、戦後イギリス社会の文化的多様性を吸収しながら、伝統歌に新たな文化的アイデンティティーを見出すことで発展した文化運動であったと見ることができる。

第4 章では、Lloyd によって再現された伝統歌のうち、1966 年のLP アルバム*First Person* (1966) に収められた二つのバラッド、“Jack Orion”と“Reynardine”のテクスト分析をおこなった。“Jack Orion”は、ハープ奏者が王様の娘を誘惑するものの、自身に変装した従者によって裏切られてしまうという筋立ての古い伝承バラッド“Glasgerion”を改作した歌である。Lloyd はハープ奏者をフィドル奏者に変え、歌に労働者階級の雰囲気を与えている。また“Reynardine”は、17 世紀から19世紀にかけてブロードサイド・バラッドの形で流布していた歌であり、女性を誘惑したアウトローを題材にしている。Lloyd はさらにアイルランド人Herbert Hughes(1882-1937) が“Reynardine”を狐として解釈した説を援用し、狐と人間の男のどちらとも捉えられる両義性を帯びたトリックスターとしての“Reynardine”を創

り出した。“Jack Orion”と“Reynardine”には、両方とも、既成概念や社会規範に囚われない登場人物が出てくる。Lloyd は、伝統歌にある抵抗精神をバラッドの重要な要素として生かしながら、現代の聴衆が共感できるような言葉を盛り込んで、彼一流のパフォーマンスによって伝統歌に新しい命を吹き込むことに成功したと評価できる。

第5 章では、戦後のフォークリヴァイヴァルの重要なレパートリーのひとつとなるエロティック・フォークソングを扱った。メタファー等の比喩形象をとおして性的な事柄を表現するエロティック・フォークソングは、中流階級の読者層を考慮して、ヴィクトリア朝とエドワード朝のフォークソング収集家によって無視されるか、あるいは不穏当と思われる箇所を大幅に削除、改変して紹介されてきた。この章では、エロティック・フォークソングに関する論争が繰り広げられた雑誌*Spin* を検討したうえで、歌曲“The Bonny Black Hare”を分析した。エロティック・フォークソングは自然と人間が調和した平和な世界を体現していると主張したロイドの見方は、性に対する当時のイギリス社会の（「寛容な社会」へと向かう）変化と合致しており、彼の紹介した一連の歌は戦後のフォークリヴァイヴァルにおける重要なレパートリーとして位置づけられることとなった。

第6 章では、戦後のフォークリヴァイルにおいて評価された炭鉱歌に着目した。1950 年代に始まったLloyd の炭鉱歌収集は、炭鉱歌を産業フォークソングのジャンルとして定義し、継承すべき重要な文化であることを示した。次に、MacColl、Peggy Seeger、BBC プロデューサーCharles Parker (1919-80)によって制作された炭鉱労働者についてのラジオ・ドキュメンタリーである*The Big Hewer*(1961)の分析をおこない、炭鉱歌の実践的な活用に目を向けた。採炭夫の巨人伝説に関連した歌を素材とし、インタビューを含むラジオ・ドキュメンタリーの形式をとおして展開される*The Big Hewer* は、炭鉱労働者の戦いと連帯感の記憶と経験を表象している。Lloyd とMacColl の炭鉱歌における貢献は、炭鉱歌を限定的な労働者の文化として捉えるのではなく、人びとが共感できる文化へと押し上げた。

第7 章は、戦後のフォークリヴァイヴァル運動のもうひとつの重要な側面である平和運動との関わりを検証した。この章では、第二次世界大戦後の日本で始まった「うたごえ運動」と戦後イギリスのフォークリヴァイヴァルの接点に注目することによって、フォークリヴァイヴァルが国内にとどまらない、国際的な運動であったことを論じた。「うたごえ運動」は、共産主義あるいは社会民主主義を思想的基盤とした労働者と学生を主体とする大衆運動であり、冷戦初期の時代のなかで、合唱をとおして平和活動を促進していた。1954年に発表された反核をテーマにした歌曲「原爆を許すまじ」（作詞：浅田石二、作曲：木村航二）は、「うたごえ運動」のなかから生まれた最重要の歌の一曲である。この歌は1955年にワルシャワで開催された世界青年学生祭典のなかで歌われ大きな反響を呼んだ。MacColl がこの歌を英訳し、“Never Again the A-Bomb”というタイトルで、イギリスのフォークミュージック雑誌*Sing*に載せたことを契機に、1958 年に始まったイギリスの核兵器撤廃運動（CND）の行進で歌われるようになった。このように、戦後のフォークリヴァイヴァルは時事的な問題を扱った歌（topical songs）の創作をとおして、イギリス国内のみならず国際的な文化運動へと発展した。

本研究は、以上のように、歌のテクストをその歴史的文脈を踏まえて分析することによって、限定的なコミュニティのなかで歌い継がれてきた伝統歌が、戦後フォークリヴァイ

ヴァルの取り組みのなかで、新たな役割や意味を与えられ、広範な世界でより多くの人びとが共有できる歌へと変容する、その実践的な過程を明らかにした。フォークリヴァイヴァルは、コミュニティの形成と経験の共有を重視しており、それは伝統歌という媒体、フォークソング収集家、歌い手、聴衆の密接な関係性によって成立している。第3 章で論じているように、イギリス国内におけるアメリカ的大量消費社会・大衆文化への懸念と、それに対抗し、オルタナティヴな民衆の歌の世界を創り出そうするLloyd とMacColl の熱情は、長年にわたる伝承歌謡の調査・研究の学問的蓄積に裏打ちされ、戦後フォークリヴァイヴァルが発展する最大の原動力となった。Lloyd は*Folk Song in England* (1967)のなかでフォークソングが戦後のフォークリヴァイヴァルにおいて「第二の存在」(the Second Existence)を経て、「最初の、限定された時代よりも、はるかに力強い生命力を享受している」と論じている (408)。ここでの「第二の存在」という語句は、伝統歌をただ変えるのではなく、過去のどこかの時点でおそらく消失していた要素を呼び起こし、同時代の人びとが共感できるような言葉を紡ぎ出し、聴衆と歌い手との新たなパフォーマンスの場で創造的に再生させることに、フォークソングの未来があるということを示唆している。未知なる過去との対話として伝統歌を用いることで、人びとが現実世界のなかで受動的存在とならず、積極的に社会に関与していくヴィジョンは、核兵器撤廃運動や日本の「うたごえ運動」にも共通点を見出すことができる。このように、戦後のフォークリヴァイヴァルはフォークシーンという音楽領域の開拓に留まらず、歌をとおして、イギリス、アメリカ、さらには日本の社会・政治運動の領域に積極的に関与しており、この文化運動の国際的な広がりを実証している。社会改革を推し進める一助となる民衆歌の役割は、第1 章で論じたように、1880 年代にWilliam Morris をはじめとするラディカルな社会主義運動のなかで実践され、その精神は、第二次世界大戦後のフォークリヴァイヴァルに受け継がれている。したがって、戦後のフォークリヴァイヴァルを単に労働者階級の文化という枠組みのなかで捉えるのではなく、伝統歌を介して、出自の異なる多様な人びとが繋がる世界を形成しようとした実践的な文化運動であること、そしてこの運動が第二次世界大戦後のイギリスにおいて重要な文化的、政治的、社会的な役割を果たしたことを本論文の結論とする。

参考文献

Boyes, Georgiana. *The Imagined Village: Culture, Ideology & the English Folk Revival* . Manchester UP, 1993.

Brocken, Michael. *The British Folk Revival: 1944-2002* . Ashgate, 2003.

Harker, Dave. *Fakesong: The Manufacture of British "Folksong" 1700 to the Present Day* . Open UP, 1985.

Laing, Dave et al. *The Electric Muse: The Story of Folk into Rock* . Methuen,1975.

Lloyd, A. L. *Folk Song in England* . Lawrence & Wishart, 1967.

---. *The Singing Englishman: An Introduction to Folk Song* . 1944. The Workers' Music Association, 1951.

Mitchell, Julia. *Postwar Politics, Society and the Folk Revival in England,1945-65* , Bloomsbury, 2020.

Sweers, Britta. *Electronic Folk: The Changing Face of English Traditional Music* . Oxford UP,

2005.
Williams, Raymond. “Culture is Ordinary.” *Resources of Hope: Culture,Democracy, Socialism*, edited by Robin Gable. Verso, 1989, pp. 3-18.
---. “The Idea of a Common Culture.” *Resources of Hope: Culture, Democracy,Socialism*, edited by Robin Gable. Verso, 1989, pp. 32-38.
Woods, Fred. *Folk Revival: The Rediscovery of a National Music* . Blandford,1979.

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

上記委員による審査委員会は、廣瀬絵美氏（以下、著者）より提出された博士学位申請論文“A Study of the Contributions of A. L. Lloyd and Ewan MacColl to the Post-War Folk Revival in 1950s and 1960s Britain”（以下、本論文）について審査し、以下のような結論を得たので、報告する。

論文の概要

本論文は、1950年代から60年代にイギリスで展開されたフォーク・リヴァイヴァルと呼ばれる民謡復興運動を取り上げ、この運動において中心的な役割を果たした民俗学者・民謡歌手のA. L. ロイド（1908-82）と、俳優・戯曲家・民謡歌手のイワン・マッコール（1915-89）の活動を辿り、彼らの主要作品を戦後イギリスの社会的文化的コンテクストのなかに位置づけつつ分析することによって、同運動への二人の貢献の度合いを論じている。第二次世界大戦後この運動は、レコードやラジオ、テレビなどのメディア、またフォーク・クラブという場をとおして、長く伝承されてきたバラッド歌やフォークソングを用いて、マス・カルチャーや商業主義と結びついた支配的な社会システムとは異なる、新たな音楽文化の形成をめざした。本論文は、ロイドとマッコールの仕事に注目することで、この運動自体の文化史的意義を検討している。

アメリカのフォーク・リヴァイヴァルの研究が盛んにおこなわれている一方で、イギリスのフォーク・リヴァイヴァルの研究は多くない。ロイドとマッコールはイギリス共産党員であったため、従来の研究では、左翼的な政治観や労働者階級の価値観を伝統歌に押し付けて歪ませたという批判的な意見が支配的だった。しかし近年では、そうした限定的な見方だけではフォーク・リヴァイルの文化運動としての広がりを理解できないとして、別のいくつかの観点からの研究が現われてきた。代表的な先行研究のひとつ、Julia Mitchell著 *Postwar Politics, Society and the Folk Revival in England, 1945-65* (2020)は、アメリカの大衆文化への反抗、ニューレフト運動、さらにはウィリアム・モリス（1834-96）が主導したアーツ・アンド・クラフツ運動の文脈から論じることによって、フォーク・リヴァイヴァルに新たな視座を与えている。

このような先行研究をもとに、本論文では、フォーク・リヴァイヴァルの歴史的・社会的検証を進めるとともに、従来等閑に附されていた歌詞のテクスト分析をおこない、ロイドやマッコールが使ったフォークソング（バラッド、炭鉱歌、労働歌）を分析している。

その際に注目しているのは、それらの歌が伝統歌の本来の要素を損なわずに、現代の聴衆が共感できるような新しい意味や役割を果たしえているか否かという点である。またアメリカや日本との関わりについても調査し、イギリス国内のみならず国際的な文化運動としての意義を明らかにしている。方法としては、上述のように、歌詞のテクスト分析を主とし、資料としてはLPレコード等の音声資料、雑誌記事、ライナーノーツ、フォーク・リヴァイヴァルを経験した人たち、あるいはその家族のインタビューを含む。

戦後のフォーク・リヴァイヴァルを思想的に理解する上で、レイモンド・ウィリアムズの言う「共通文化」(Common Culture)が、この文化運動の特徴を表す概念として本論文で援用されている。ウィリアムズは「人びと（the people）全体が意味や価値の創造に参加し、創り上げていく」ことが「共通文化」であるとした。イギリスのフォーク・リヴァイルに置き換えて考えると、「共通文化」の可能性は、歌を歌うコミュニティやパフォーマンスをとおして、フォークソングが人びとに共有され、自由な解釈を与えられていった過程のなかに見出すことができる。戦後イギリスの急激な社会変動のなかで、過去の民衆の記憶をとどめるフォークソングが未来の指標として、既存の社会体制とは異なるオルタナティブなコミュニティと世界観を形成していたという仮説を立て、これを明らかにすることで、戦後イギリス文化の領域に新たな知見を与えることを本論文は図っている。

本論文の目次は以下の7章構成となっている。

Introduction

Chapter 1: From William Morris to Cecil Sharp: Folk Song Revival in the late Victorian and Edwardian age
- 1-1: William Morris and Socialist Songs
- 1-2: The Late Victorian and Edwardian Folk Song Revival

Chapter 2: A. L. Lloyd and Ewan MacColl: Activities in the 1930s and 1940s
- 2-1: A. L. Lloyd's Short Story "The Red Steer"
- 2-2: A. L. Lloyd's Early Works on English Folk Song
- 2-3: MacColl's Theatre, Traditional Folk Song and Song Writing

Chapter 3: The Social and Cultural Background of the Post-War Folk Revival in Britain
- 3-1: Americanization
- 3-2: The New Left
- 3-3: The Use of Mass Media
- 3-4: Topic Records
- 3-5: Skiffle
- 3-6: Folk Club
- 3-7: Festivals

Chapter 4: A. L. Lloyd's Adaptation of Ballads "Reynardine" and "Jack Orion"

4-1: What is “Revival” / “Traditional” Singer
4-2: Reynardine
4-3: Representation of the Outlaw in Broadside “Reynardine”
4-4: Representation of Fox in “Reynardine”
4-5: Folk Revival Scene and “Reynardine”
4-4: “Jack Orion”
4-5: Glasgerion as a Harpist
4-6: A. L. Lloyd’s “Jack Orion”
4-7: The Melody of “Jack Orion”
4-8: The Role of Willow Tree

Chapter 5: A. L. Lloyd’s View of Erotic Folk Songs and His Reworking of “The Bony Black Hare”
5-1: Censorship of the Late Victorian and Edwardian Folk Song Revival
5-2: Discussion over Erotic Folk Songs
5-3: Brief Introduction to “The Bonnie Black Hare”
5-4: A Text Analysis of “The Bonnie Black Hare”

Chapter 6: The Role of Coal-mining Songs in the Post-War Folk Revival
6-1: Coal-mining Songs as a Genre of “Industrial Folk Song”
6-2: *Come All Ye Bold Miners*
6-3: Coal-mining Songs and the Folk Revival
6-4: Ewan MacColl’s Role in Coal-mining Songs
6-5: *The Big Hewer*

Chapter 7: The Post-War Folk Revival and Pacifism
7-1: *Uranium 235*
7-2: The CND Movement
7-3: “Never Again the A-Bomb”

Conclusion
Works Cited

第１章では、19世紀後半から20世紀初頭のイギリスで興隆した「社会主義運動における歌の文化」と「フォークソング収集」を取り上げている。そこではデザイナー、詩人、社会主義者であったウィリアム・モリスが1885年に刊行した運動歌集『社会主義者のための歌』(*Chants for Socialists*)に収録された詩篇を詳細に分析している。モリスが創作したこのジャンルの歌は、古い歌謡やフォークソングのメロディーで歌われることが多かった。ひとつの大義を目指して社会改革を掲げる人びとが連帯意識を強めるために、歌が社会主義運動において重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。さらに、第1章の後半で

は、「フォークソング収集」の活動について検証した。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、急速に進む産業化や都市化によって失われつつあった伝統的なフォークソングを救いだそうとする目的で、中流階級層でフォークソング収集が活発におこなわれた。イングランドのフォークソング活動家として名高いセシル・シャープ（1859-1924）は、フォークソングを国民文化の領域まで高めるべく音楽教育を通してフォークソングを導入しようとした。しかし、シャープをはじめとするこの時期のフォークソング収集家は、教育の道徳的観点あるいは中流階級の読者層を配慮して、ピアノ伴奏をつけるなどして、本来の民謡とかなり性格が異なる形態に変えた。第二次世界大戦後のフォーク・リヴァイヴァルは、過去のフォークソング収集家が残した膨大なコレクションを引き継ぎながら、人びとがより身近にフォークソングを享受できる世界を求めた。

第2章では戦後フォーク・リヴァイヴァルが起動する以前の、1930年代から40年代にかけてのロイドとマッコールがおこなった活動を、文学、ジャーナリズム、演劇、フォークソング研究の諸領域から論じている。例えば、ロイドは1934年に創刊された『レフト・レビュー』の創刊メンバーの一人であり、オーストラリアの牧畜労働者と牧畜経営者との対立をテーマにした“The Red Steer”という短編小説を書いている。また1944年に発表した*The Singing Englishman*では、マルクス主義史観に立ってフォークソングを論じ、社会変動から生じたフォークソングは労働者階級の貴重な文化的偉業であると主張している。マッコールはイギリスの演劇運動に関与しており、路上劇団「レッド・ メガフォンズ」に参加したのち、1934 年にジョウン・リトルウッド（1914-2002）とともに、「シアター・オブ・アクション」（1936 年に「シアター・ユニオン」と改称）を結成した。マッコールは俳優として演じるのみならず、 劇団のために戯曲も数多く書き、劇中にフォークソングや自ら作詞した歌を使用した。それぞれの労働者階級の出自やイギリス共産党員であった背景を生かして、歴史・政治・文化への深い造詣と表現方法を得て、ロイドとマッコールのフォーク・リヴァイヴァルにつながるヴィジョンを形成した。

第3章では1950 年代から1960 年代にかけてのイギリスのフォーク・リヴァイヴァルが、ラジオ、テレビ等のマスメディア、LPレコードの製作、（パブの空きのスペースで開催されていた）フォーク・クラブ、フォーク・フェスティヴァルといった場を活用した過程を論じた。戦後のフォーク・リヴァイヴァルが形成された背景には、（アメリカのフォーク・リヴァイヴァルに多くの影響を受けながらも）当時イギリス社会において広まりつつあったアメリカ的な大量消費文化を人びとが受動的に享受することによって、人びとの批評精神を奪っているのではないかという懸念があり、その反動として創造的な民衆歌の世界を創り出そうとする機運が生じた。それを担った人びとは、政治的にはイギリス共産党から離れて、「文化」を重要視するニューレフトに思想上共鳴している。またフォーク・リヴァイヴァルが若者の心を捉えたきっかけとして、1956年から57年にかけてブームになった「スキッフル」と呼ばれる音楽ギャンルとの関連性を論じた。スキッフルは1920年代アメリカに起源をもち、ギターや洗濯板などを使った手作りの楽器を使用した音楽ジャンルである。アメリカのフォークソングやブルースを題材とするスキッフルは、一部の若者がフォークソングに興味をもち、フォーク・クラブで演奏をするような流れを作り出した。

第4章ではロイドによって再現された伝統歌のうち、1966年のLPアルバム*First Person*(1966)に収められた二つのバラッド“Reynardine”と“Jack Orion”のテクスト分析をおこなっ

ている。“Reynardine”は17世紀から19世紀にかけてブロードサイド・バラッドの形で流布した歌であり、女性を誘惑したアウトローの話しを題材にしている。ロイドは、アイルランドで伝承された歌がReynardineを狐と解釈していた説からインスピレーションを得て、狐と人間の男のどちらとも捉えられる両義性を帯びたトリックスターとしての“Reynardine”を創り出した。また“Jack Orion”は、ハープ奏者が王様の娘を誘惑するものの、自身に変装した従者によって裏切られてしまうという筋立ての古い伝承バラッド“Glasgerion”を改作した歌である。ロイドはハープ奏者を（イングランドのフォーク・シーンでも使われていた）フィドル奏者に変え、歌に労働者階級の雰囲気を与えている。両方とも既成概念や社会規範に囚われない登場人物が出てくる。ロイドは、伝統歌にある抵抗精神をバラッドの重要な要素として生かしながら現代の聴衆が共感できるような言葉を盛り込み、パフォーマンスによって伝統歌に新しい命を吹き込むことに成功したと言える。

第5章では、戦後のフォーク・リヴァイヴァルの重要なレパートリーのひとつとなるエロティック・フォークソングを扱っている。メタファー等の比喩形象をとおして性的な事柄を表現するエロティック・フォークソングは、19世紀及び20世紀前半のフォークソング収集家たちによって、中流階級の読者層を考慮して改変されてきた。この章では、フォークソング雑誌*Spin*のなかで繰り広げられた論争を検討したうえで、狩りをする男性と野うさぎを女性に例えた歌曲“The Bonny Black Hare”を分析した。エロティック・フォークソングは自然と人間が調和した平和な世界を体現していると主張したロイドの見方は、性に対する当時のイギリス社会の（「寛容な社会」へと向かう）変化と合致しており、彼の紹介した一連の歌は、戦後のフォーク・リヴァイヴァルにおける重要なレパートリーとして、男性のみならず女性のパフォーマーにも歌われた。

第6章では、戦後のフォーク・リヴァイルにおいて評価された炭鉱歌に着目した。1950年代に始まったロイドの炭鉱歌収集は、炭鉱歌を産業フォークソングのジャンルとして定義し、継承すべき重要な文化であることを示した。次に、マッコール、ペギー・シーガー（1935-）、またBBCのプロデューサーであったチャールズ・パーカー（1919-80）によって制作された炭鉱労働者についてのラジオ・ドキュメンタリーである*The Big Hewer*（1961）の分析をおこない、炭鉱歌の実践的な活用を明らかにしている。炭鉱夫の巨人伝説に関連した歌を素材とし、インタビューを含むラジオ・ドキュメンタリーの形式をとおして展開される*The Big Hewer*は、炭鉱労働者の戦いと連帯の記憶を伝えている。ロイドとマッコールの炭鉱歌における貢献は、炭鉱歌を限定的な労働者の文化として捉えるのではなく、人びとが共感できる文化へと押し上げたと言える。

第7章は、戦後のフォーク・リヴァイヴァル運動のもうひとつの重要な側面である平和運動との関わりを検証している。この章では、第二次世界大戦後の日本で始まった「うたごえ運動」と戦後イギリスのフォーク・リヴァイヴァルの接点に注目することによって、フォーク・リヴァイヴァルが国内にとどまらない、国際的な運動であったことを論証している。「うたごえ運動」は、共産主義あるいは社会民主主義を思想的基盤とした労働者と学生を主体とする大衆運動であり、冷戦初期の時代のなかで、合唱をとおして平和活動をおこなった。1954年に発表された反核をテーマにした歌曲「原爆を許すまじ」（作詞：浅田石二、作曲：木村航二）は、「うたごえ運動」のなかから生まれた最重要の歌曲である。この歌は1955 年にワルシャワで開催された世界青年学生祭典のなかで歌われ大きな反響

を呼んだ。マッコールがこの歌を英訳し、“Never Again the A-Bomb”というタイトルでイギリスのフォーク・ミュージック雑誌*Sing*に載せたことを契機に、1958年に始まったイギリスの核兵器廃絶運動（CND）の行進で歌われるようになった。このように、戦後のフォーク・リヴァイヴァルは、時事的な問題を扱った歌（topical songs）の創作をとおして、イギリス国内のみならず国際的な文化運動へと発展した。

本論文は、以上のように、歌のテクストをその歴史的文脈を踏まえて分析することによって、限定的なコミュニティのなかで歌い継がれてきた伝統歌が、戦後フォーク・リヴァイヴァルの取り組みのなかで、新たな役割や意味を与えられ、広範な世界でより多くの人びとが共有できる歌へと変容する、その実践的な過程を明らかにしている。A. L. ロイドは、伝統歌をただ変えるのではなく、過去のどこかの時点で失われていたと思われる要素を呼び起こし、同時代の人びとが共感できるような言葉を紡ぎ出し、聴衆と歌い手との新たなパフォーマンスの場で創造的に再生させることを「第二の存在」(the second existence)と述べている。したがって、ウィリアム・モリスをはじめとする社会主義の試みとの共通性、日本の「うたごえ運動」や核撤廃運動との関わりから示されているように、フォーク・リヴァイヴァルは、戦後のイギリスの一時的／限定的な（労働者階級の）文化的産物ではなく、伝統歌を介して、出自の異なる多様な人びとが繋がる世界を形成しようとした実践的な文化運動であったこと、そしてこの運動が第二次世界大戦後のイギリスにおいて重要な文化的、政治的、社会的な役割を果たしたことを本論文の結論としている。

審査の結果

本論文は、第二次世界大戦後のイギリスにおけるフォーク・リヴァイヴァルを「文化運動」(a cultural movement)としてとらえ、その牽引者のA. L. ロイドとイワン･マッコールがさまざまなメディア領域を横断しながら果たした重要な役割を跡づけることで、この運動の重層性と展開の広がりを明らかにしている。その際に主に用いているのは文学研究におけるテクスト分析の手法である。本論文の前半を占める第1章から第3章までは、戦後のフォーク・リヴァイヴァルへと至る19世紀後半以降の歴史的コンテクストと、この「文化運動」の同時代的なコンテクストを丁寧に記述している。後半の第4章から第7章にかけては、具体的な曲の成立過程や歌詞および曲調の細やかな分析が際立っている。刊行された文献をそのヴァリアントまで忠実に追いながら検討を加えていく手法はとても手堅い。そうしたテクスト分析による成果は、従来の音楽史的なフォーク・リヴァイヴァルへのアプローチに対して、英文学研究のディシプリンを身につけた著者による貴重な貢献であると言えよう。本書で展開されている論理はとても堅牢であり、異なる立場からなる多くの先行研究にも十分に目配りしつつ、「文化運動」としてのフォーク・リヴァイヴァルが、いかにレイモンド・ウィリアムズがいうところの「共通文化」の具現化へと向かっていったか、という独自の視点から本論文全体を通じて丁寧に論じている。

本論文の歴史的および同時代的コンテクストの記述は、審査委員たちにとって未知の情報が多く、たいへん読み応えがあった。それと同時に、十分に情報が整理されていたので、読みやすくもあった。とくに、さまざまなメディアを横断しながらのロイドたちの活動、そして多くのグループとの協力関係・共同作業は、“traditional songs”のリヴァイヴァル、という言い方が醸し出す後ろ向きのノスタルジックなイメージとは異なる、きわめてモダ

ンな「文化運動」であったことを論証しえている。本論文の前半で戦後フォーク・リヴァイヴァルのコンテクストが丁寧に跡づけられたことは、ロイドたちが“traditional songs”に“new meanings and values”を与えたプロセスをめぐる本論文後半の具体的なテクスト分析の説得力につながっている。

その後半部分では、イギリスのフォーク・ロックバンド、フェアポート・コンヴェンションの持ち歌として広く知られる“Reynardine”の成立過程をめぐる論述は綿密で、著者の分析手法が十分に発揮されている。過去の“traditional songs”やその断片の“authenticity”を損ねることなく、しかしそこにcreativeな要素を込めながら“new meanings and values”を作り出す過程の分析は、さまざまな素材やメディアにおける“adaptation”をめぐる近年盛んな研究での議論に接続できるものと期待できる。炭鉱歌を扱った第6章は、「共通文化」に向かうフォーク・リヴァイヴァル運動が持っていた可能性をめぐって、本論文においてもっとも重要な議論を展開している。なかでも、ドキュメンタリー映画やBBCラジオ番組や1951年の「イギリス祭」（Festival of Britain）との関わりは、この「文化運動」の多面性・メディア横断性を十分に明らかにしており、その「共通文化」的側面は注目に値する。

戦後日本の平和運動とうたごえ運動のなかから生まれた「原爆を許すまじ」が海外に紹介され、歌詞が英訳され、イギリスの核兵器廃絶運動のなかで歌われた経緯を論じた第7章は、従来一般に知られていなかった細部の記述を多く含み、国境を超えての反戦歌の受容史についての貴重な貢献をなしていると評価できる。

審査委員会では以上のような評価がなされたうえで、本論文での研究のさらなる可能性を示すために、いくつか指摘がなされた。

第一に、本論文のタイトルにも示されているところであるが、本論文の研究の主眼がcontributionsにあった点の「副作用」として、ロイドとマッコールのフォーク・リヴァイヴァルという限定されたシーンにおける貢献が明らかにされつつも、それが広くイギリス社会や文化に果たした役割が何であるのかが必ずしも明らかではない。1950年代から1960年代にかけてのフォークソングの流行は、アメリカはもとより日本でも見られた現象である。歌は世につれ、世は歌につれ、ということがあるならば、この独特の空間と「思想」をもつ歌謡形式の流行は、広くその「世」の風俗や文化というものを書き換えていたことが想定される。この点に挑んだ意欲的な章が第7章であり、この章では、リヴァイヴァルのシーンのなかにおいてロイドとマッコールが果たした役割――著者の言葉でいえば“contributions”――が立証されてはいるものの、それが広くパシフィズムに与えた影響がいかなるものなのかは十分に論じられてはいない。

これは同章で紹介されている日米交流の事例を、アメリカ合衆国の「フォーク・シーン」と対比させれば、さらに同章、ひいては本研究がもつ可能性が明らかになる。1950年代、欧州の反核運動に参加することは、アメリカ合衆国においては、政治的・社会的な「死」を意味することであった。たとえば、当時のアメリカを代表する民衆の歌の歌い手、ポール・ロブソンは、（旧）左翼が主催したパリ平和会議に出席したのを契機に、下院非米活動委員会での証人喚問を受け、反米活動家として「ブラックリスト」に載せられて、その後のシンガー／エンターテイナーとしてのキャリアを抹殺されることになった。第3章で紹介されているように、戦後、アメリカ合衆国のフォークソング蒐集家の代表的人物アラ

ン・ローマックスはイギリスに活動の拠点を移していたが、それはアメリカでの文化政治的な環境が、赤狩りの激化に伴い窒息させられていたからだと思われる（同時期のアメリカでは、政治的メッセージを持つ「フォークソング」はハイランダー・フォーク・スクールのような限定的な空間でかろうじて生き残っていた）。しかし、日英、そしてヨーロッパにおいて、「歌謡」をめぐる文化政治上の交流が、第7章で論じられている豊かで興味深い展開をしていたとすれば、そこにはグローバルなフォークソング世界のなかに、冷戦を超え出るいまひとつの政治空間が存在していたことを意味し、かかる空間の存在に、その後の対抗文化交流への伏線を見ることができる。そうだとすれば、イギリスにあったフォーク文化とは、この時代、その後のアメリカ合衆国での文化的・政治的な叛逆をも準備する豊穣さをもっていたと考えることもできる。さらに大きな指摘をすれば、ポール・ギルロイが19世紀の黒人スピリチュアルズでおこなっているように、フォークソングを通じた文化（交流）史を通じて、環大西洋アングロリベラリズムの相違を指摘しながら、それを書き換えていくことも可能であろう。

もちろん本論文の強みは、焦点を限定しているところにある。しかし、（イギリスに与えた影響が大きいとされる)アメリカ合衆国のフォーク･シーンに関わる論考を加えれば、もっとダイナミックでスケールの大きなフォーク・リヴァイヴァル解釈が可能である。ここに本論文の可能性があると同時に､十分に議論が展開されずに終わっている余白がある。

これとおなじく、可能性と余白の二つの点を同時に示しているのが、第3章で紹介されているスキッフル（skiffle）という音楽形態についてである。ここに現れているのは、70年代のパンクや、今日のヒップホップにも似た「批判精神」であろうし、ここには50年代フォーク・リヴァイヴァルという限定的なシーンを超え出る何かである。ここに起きていることは、「白人」が有色の人びとの音楽様式に出会ったということ以上のもの、おそらくはイギリス文化を書き換えていく活力があるのではなかろうか。ジョン・レノン、ミック・ジャガー、ジミー・ペイジに影響を与えたというのは相当のものである。周知の通り、60年代のユース･カルチャーが与えた文化的な衝撃は、英米（日）ともに甚大なものがあり、99頁で著者自身が指摘しているように、今後の研究が必要だとされるのであれば、この文化現象にもまた、歌が「世」を「連れていく」ことを解明できる何かがあるのではなかろうか。

また、戦後フォーク・リヴァイヴァルを「共通文化」としての「文化運動」として全般的に捉えることは、本論文の最大の強みであると同時に、ところどころ、もう一歩踏み込んでほしいという要望へとつながるようにも思われる。ひとつには、レイモンド・ウィリアムズによる「共通文化」の使用例と比較すると、本論文での「共通文化」の使い方は脱ー政治化されてしまっているという感は否めない。あるいは、“an alternative community”の形成というような表現が用いられたときに、その具体的なありようがいまひとつ見えて来ず、抽象的な概念にとどまっているように思われる。章の構成、あるいは論述については、各章のまとめの部分をもう少し充実できたのではないか。たとえば第4章は2つの曲を分析しており､それ自体はたいへん読み応えがあるのだが､最終的には2つの曲を取り上げたことの意義というか、両者の違いから見えてくる評価を結論部分で明確に示されるほうがよかったと思われる。また、第4章はもう少しセクションの構成を工夫すると、議論のダイナミックな山場をより効果的に論述できたであろう。また、これはロイドとマッコール

の達成についてすでに十分な水準の議論がなされているがゆえの要望であるが、彼らの活動の限界や矛盾・齟齬、未来へとつながる失敗にも光を当てると、より立体的な論考になったのではないかと思われる。

本審査委員会では以上のような評価とコメントが出された。これらに含まれる問題的の指摘、また改善点の提案はあるものの、冒頭に記したとおり、本論文の手法は手堅く、焦点は明確である。300ページにおよぶ本論文の英語は平明かつ品のある文体で書かれている。この点も本論文の重要な長所として特筆できる。また2021年12月9日に開催された博士論文公開審査会（リモートにて開催）において、審査委員からの（上記の点を含む）さまざまな質問に対して著者は誠実かつ的確に応答したことも付言しておきたい。第二次世界大戦後のイギリスの文化運動としてのフォーク・リヴァイヴァルの研究として、本論文の学問的価値の高さに疑いの余地はなく、全審査委員がこれをもって論文提出者に博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論を得たことを、ここに報告するものである。